

10月6日 年間第27主日

ハバ 1:2-3, 2:2-4 IIテモ 1:6~14 ルカ 17:5~10

1. ルカ

v.10 「あなたがたも同じことだ。自分に命じられたことをみな果たしたら、“わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならぬことをしただけです”と言いなさい。」

ちょうど先週、「第二バチカン公会議公文書／改訂公式訳」が発売されましたので、これに言及したいと思います。公文書は全部で16あるのですが、そのすべての冒頭に次のように記されています。「司教パウロ 神のしもべたちのしもべ 聖なる公会議の諸教父とともに 永遠の記念のために」 公会議に参加する司教たちは“教父”と呼ばれるのですが、この諸教父は神の僕たちであって、教皇パウロ六世は自らも彼らと共に神の民に奉仕する僕であると宣言していることが分かります(教会憲章 18 参照)。

使徒パウロも、自らを「キリスト・イエスの僕」と呼びました(ロマ 1:1、フィリ 1:1)。この「僕」とは奴隷(δοῦλος)のことであって、賃金を受ける雇い人(15:17,19)に対して、主人の所有物であって無報酬で働く者のことなのです。

これは、使徒たちやその後継者である司教たちだけのことを言っているわけではありません。そうではなくて、すべての信者のことを言っているのです。「つまり、あなたがたは罪に仕える奴隷となって死に至るか、神に従順に仕える奴隷となって義に至るか、どちらかなのです。」(ロマ 6:16) 確かに、「信徒に固有の特質は、世俗に深く関わっていること」(教会憲章 31)ではありますが、だからと言っても、決してこの世の奴隷ではなくて、あくまでもキリスト・イエスの奴隷として世俗の事柄に関わるのです。神に仕えることと世俗に仕えることを教役者と信徒が分担する、あるいは信者自身もミサと社会活動という二つの分野で、別々の霊的基準に従って務めを実行するなど考えるのは間違いです(II コリ 12 章参照)。

信仰には“大きい信仰”と“小さい信仰”があるのではなくて、実はイエス・キリストへの信仰は“ある”か“無い”かのいずれかでしかないことを、vv.5-6は指摘しているのです。明確な信仰があつてこそ、「霊に燃えて、主に仕える」(ロマ 12:11)ことが可能だからです。

教皇も司教も、典礼も教会も、「一切はあなたがたのもの、あなたがたはキリストのもの、キリストは神のものなのです。」(I コリ 3:22-23)

2. IIテモ

v.12 「わたしは自分が信頼している方を知っており、わたしにゆだねられているものを、その方がかの日まで守ることがおできになると確信している……」

第二バチカン公会議にもオブザーバーとして招待されたプロテスタントの神学者カール・バルトは、その著書(Dogmatik in Grundriss)の初めの三章で、「信仰とは信頼を意味する」「信仰とは認識を意味する」

「信仰とは告白を意味する」という主題を掲げています。

カトリックでは、“信仰告白”よりも“信仰宣言”という表現の方が馴染み易いかも知れません。いずれにしても、私たち信者はすべてキリストの救いに“信賴”し、教会に委ねられた信仰の遺産である福音を“認識して”、神に従順に仕える奴隷として“信仰宣言する”のです。もし誰かがこれとは違った仕方です“信仰”という教会用語を解釈しているなら、恐らくそれは健全なこと(v.3)ではないでしょう。

「信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。」(ヘブ 11:6) 繰り返しますが、信仰は“ある”か“無い”かのいずれかでしかないのです。信仰がないのに、その隠れ蓑に“強い信仰”や“大きな信仰”を与えてくださいと祈っているとしたら、神に喜ばれることなど決して出来はしません。

3. ハバ

v.4 「しかし、神に従う人は信仰によって生きる。」

この預言書は、バビロンの王ネブカドネツアルの攻撃の脅威にさらされていた、恐らくエレミヤと同時代(王下 24~25 章)のものであって、ハバククはエルサレムの窮状を神に訴え、与えられた答えがこれでありました。「それは終わりに向かって急ぐ。……それは必ず来る。」(v.3) しかし、神からの救いを忍耐して待つ民の間には、信じる者と信じない者の分離が起きるであろう。神に従う人だけが、信仰によって生きるからです(ロマ 1:17 参照)。

だれも神に代わって救いを作り出したり、人間の努力や能力によって地上に神の国のような世界を実現することは出来ません。福音を通して啓示された神の義は、「初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。」(ロマ 1:17) 私たちの主イエス・キリストを通して神に感謝しましょう。「あなたがたは、かつては罪の奴隷でしたが、……今は罪から解放されて神の奴隷となり……」(ロマ 6:17,22)

アーメン、ハレルヤ。

10月13日 年間第28主日

王下 5:14～17 Ⅱテモ 2:8～13 ルカ 17:11～19

1. ルカ

v.19 「それから、イエスはその人に言われた。“立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。”」

イエスは重い皮膚病を患っている十人の患者の訴えを聞いて、その全員を癒されました。しかし、癒されたのは十人だったけれども、その中で救われたのは一人だけだったというのが、今朝のテキストの内容にあります。残る九人は救われなかったということ、私たちへの警告として聞くことが、ここでは求められているのです。

つい最近、またまたイタリア最南端のランペドゥーザ島沖で難民を乗せた船が沈没し、多くの死者が出たというので、イタリアのアルファノ内相が“人命を救うためにEUはもっと関与すべきだ”と、支援強化を要請したとの報道が、今月10日の新聞で伝えられています。私たちは教皇フランシスコが、先にこの主旨の発言を現地でしていたことも知っています。

カトリック信者の中でどれだけの人が、このような救援活動が、その結果その中の何人かが“神に救われる”とき、初めて意味を持つのだということ、本当に理解しているでしょうか。

EUの担当機関は9日、緊急予算として200万ユーロをイタリアに回すと表明したが、“もう予算がない”と資金不足を訴えていると報道されています。ルカ5:12～16にある類似のテキストでは、癒しを求めてあまりに大勢の群衆が集まって来たので、さすがにイエスも手に負えなくなって人里離れた所に退かれたと書かれています。神の子イエス一人では力不足ということだったのででしょうか。現代人の多くが、実際そのように考えている傾向があります。なぜなら彼らは、“神からの救い”を願っているのではなくて、ただ貧困や病気や困難からの“実生活上の癒し”をこそ求めているからです。

イエスの癒しに拍手を送るためではなくて、「この外国人のほかに、神を賛美するために戻って来た者はいないのか」(v.18)という、十字架のキリストの嘆きを確かに聞くのでなければ、現代の教会は決して立つことは出来ません。あなたにとって“神からの救い”は、実際どの程度の重要性を持っているでしょうか。そのことを今朝、私たちは聖書を通して問われているのです。

2. Ⅱテモ

v.10 「わたしは、選ばれた人々のために、あらゆることを耐え忍んでいます。彼らもキリスト・イエスによる救いを永遠の栄光と共に得るためです。」

招かれ、癒されても、その中で選ばれる人は少ない(マタ22:14)ことを使徒パウロは知っていればこそ、その少数の“選ばれた人々のために”耐え忍び、労苦するという教会の使命を弟子テモテに委ね、更にそ

れが使徒継承によって代々の教会に受け継がれて行くことを期待しました(2:2)。

そこで最も大切なものは、キリストの福音への信仰宣言であり、洗礼によって新しく生まれることです(ヨハ3:5、ガラ6:15)。v.8は ロマ 1:2-4 などと同じく、当時の信仰宣言からの引用であり、vv.11-12は ロマ 6:8 などと同様に、洗礼式の賛歌からの引用と考えられるものです。

浜松教会の主日のミサでは、昨年10月頃から信仰宣言として、ニケア・コンスタンチノーブル信条を唱和するようになりました。私たちはこのことを大いに喜び、感謝を神にささげたいと思います。その上で更に、私たちは司祭の説教のためにも「感謝を込めて祈りと願いをささげ」(フィリ4:6)、説教と信仰宣言とが内容的にしっかりと結びつくようにと神に求めて行きましょう。選ばれた人々には、“癒し”よりも“神からの救い”こそが決定的に重要なのですから。

3. 王下

v.17 「僕は今後、主以外の他の神々に焼き尽くす献げ物やその他のいけにえをささげることはしません。」

このナアマンの信仰宣言がなかったら、主イエスが故郷の会堂で福音を告知する中で、この物語りを引用されることはなかったに違いありません(ルカ4:27)。癒されたことではなくて、ナアマンがイスラエルの神への信仰に立ち至ったことが、この物語りの主要なメッセージでありました。

悔い改めて“神からの救い”に至る一人の罪人のために、天では大きな喜びがあることを(ルカ15:7)、私たちはもっともっと真剣に、そして大切に考えようではありませんか。

アーメン、ハレルヤ。

10月20日 年間第29主日

出 17:8~13 IIテモ 3:14~4:2 ルカ 18:1~8

1. ルカ

v.3 「相手を裁いて、わたしを守ってください。」

“裁く”という言葉は、旧約聖書以来“弁護する”“守る”“救う”という意味で使われ、神による終末的救いへのイスラエルの待望を表明するのに用いられて来ました(詩 7:9, 98:9 他)。主イエスの受難と復活が、新約聖書でこのような“裁き”の線上で理解され、新約の神の民である教会を贖い取られた御業として説明されている(使 20:28)ことを、先ず指摘しておかなければなりません。

v.7の「選ばれた人たち」という表現が、新約の神の民を指していることは、先週の学びで取り上げたとおりです(IIテモ 2:10)。つまり、この譬え話は、そのような選ばれた信者たちが「気を落とさずに絶えず祈る」ようにと、励ましているのです。信仰とは、人の子が来る終末の完成の日まで(v.8)、「目標を目指してひたすら」(フィリ3:14)祈り続けることなのです。果たして現代の教会には、そのような信仰が本当に生きているでしょうか。大いに考えさせられる問題ではないでしょうか。

この“裁く(ἐκδικέω)”という同じ言葉が、他のところでは“復讐する”と翻訳されている例があります(ロマ 12:19、ヘブ 10:30)。それはこの言葉が、“相手に打撃を与えて、味方を救う”という意味だからです。そしてこの二つの箇所は、申 32:35 からの引用であって、復讐は神がなさること、「神は速やかに裁いてくださる」(v.7)ということを教えているのです。イエスが“復讐してはならない”と教えられたとき、恐らく、それは神がなさることだという意味でありました(マタ 5:38-42)。ルカ福音書はこれを“無抵抗主義”“平和主義”として再解釈したように思われます(6:29)。

現代のキリスト教活動家たちによる社会的発言が、終末の日には“神は正しいことを行われます。神はこの報いを実現なさいます”(IIテサ 1:6-8)という、“神の裁き”の警告、“神に対する悔い改め”(使 20:21)の宣教ではなくて、大衆運動による反体制的な攻撃、つまり権力者や富者の側に打撃を与えるという復讐的性格を強く持っているように見えるのは、私の偏見でしょうか。

2. IIテモ

v.14 「(聖書は)、キリスト・イエスへの信仰を通して救いに導く知恵を、あなたに与えることができます。」

第二バチカン公会議は、聖書に対する従来のカトリック教会の態度を一新して、神のことばの食卓がいっそう豊かに信者に供されるように、典礼の刷新を目指しました。

信者が聖書に親しむとは、“キリスト・イエスへの信仰を通して”“神のことばに耳を傾ける”ことであって、決して自分の主義や主張を先に掲げて、その理論付けに聖書を利用することではないはずです。しかし

実際には、しばしば声高にいろいろな社会的発言をする人の多くが、神が聖書を通して語っておられる本来の使信をほとんど聞き取っていないと、私は痛感しています。

「神の御前で、そして、生きている者と死んだ者を裁くために来られるキリスト・イエスの御前で、その出現とその御国とを思いつつ」(v.1)、そのような神からの福音の使信を聖書から聞き取るには、少年サムエルのように「どうぞお話をください。僕は聞いております」(サム上 3:10)という、信仰の姿勢が必要なのです。自分の主義や主張が先にあると、それは不可能です。

このv.1の終末のキリストの裁きは、先のルカ福音書の譬え話で使われていた ἐκδικέωではなくて、別の用語、羊と山羊を選り分けるように(マタ 25:31-46)、永遠の命に与る者と、永遠の罰を受ける者が区別される(マタ 13:49-50)という意味の, κρίνωという言葉が使われています。信条の中で「主は、生者と死者を裁くために、栄光のうちに再び来られます」と述べられているのも、この意味です。

3. 出

v.11 「モーセが手を上げている間、イスラエルは優勢になり、手を下ろすと、アマレクが優勢になった。」

イスラエルの神を軍旗に譬える(17:15)この象徴的な物語りで、神の民の信仰とは何であるかを明確に教えた古い伝承が、前後とは繋がりがなくここに挿入されています。今日の時代に、聖書から神のことばを聞き取ろうとしている私たちにとっては、これは身にしみるように切々と訴える語りかけ以外の何ものでもありません。

v.12 「その手は、日の沈むまで、しっかりと上げられていた。」

天上のキリストは、その終末の再臨の日まで、ひたすら神の救いに信頼して祈り続けるようにと、現代の全世界の教会に向かって呼びかけておられるのです。

アーメン、ハレルヤ。

10月27日 年間第30主日

シラ 35:15b~22a IIテモ 4:6-8,16-18 ルカ 18:9~14

1. ルカ

v.13 「徴税人は……胸を打ちながら言った。“神様、罪人のわたしを憐れんでください。”」

ミサの開祭の部で、回心の祈りを会衆一同で唱えるようになったのは、現在のローマ・ミサ典礼書が出来てからのことで、第二バチカン公会議後の刷新以前はそれは階段祈禱と呼ばれて、司祭と侍者だけの役目でありました。典礼学の進歩によって教会の最古の伝統が回復され、現在の三つの形式の祈りが作られました。飾り気のない第二形式にその核心が要約されていて、それに司祭が応えて次の言葉を宣言します。「全能の神がわたしたちをあわれみ、罪をゆるし、永遠のいのちに導いてくださいますように。」そして一同であわれみの賛歌(キリエ)を歌います。

この回心の祈りは、“人の子が来るとき”(18:8)まで祈り続ける“教会の祈り”であって、罪と死がキリストの勝利に飲み込まれる御国の到来の日(1コリ 15:54-57)に向けられているものです。“気を落とさずに絶えず祈る”ということ、私的な祈りだけではなく、何よりも教会の祈りとして理解することが大切です。

儀式書「成人のキリスト教入信式」によると、求道者は入門式で主の祈りを授与されます。儀式書の解説には、“この祈りは古代から、神の子どもとされた人々の祈りであって、将来、感謝の祭儀(ミサ)で信者とともに唱えるものである”と書かれています。

主の祈りが、感謝の典礼の“交わりの儀”の冒頭に置かれるようになった理由は、日ごとの糧を求める願いによると、ユンクマンは解説しています(ミサ p.252)。そしてこれは、聖体拝領によって先取りされる神の国の会食への招きとなります(カテキズム 2770)。ですから、主の祈りの全体は“御国が来ますように”に集約されるのであって、「国と力と栄光は、限りなくあなたのもの」という副文が早い時代から付け加えられて来たのはそのためです。

もし現代の教会が、「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」(v.14)という聖書の言葉を、ただのこの世での敬虔としてしか理解せず、もはや本気で“御国が来ますように”と祈らないなら、教会が使徒継承によって受け継いで来た「宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄」(1コリ 15:14)であるという警告を、私たちは深刻に受け止めなければなりません。「しかし、人の子が来るとき、果たして地上に信仰を見いだすだろうか。」(18:8)

2. IIテモ

v.8 「今や、義の冠を受けるばかりです。正しい審判者である主が、かの日にそれをわたしに授けてくださるのです。しかし、わたしだけでなく、主が来られるのをひたすら待ち望む人には、だれにでも授けてくださいます。」

v.18 「主はわたしをすべての悪い業から助け出し、天にある御自分の国へ救い入れてくださいます。」

公会議公文書の五番目に置かれている「エキュメニズムに関する教令」は、別れた兄弟(プロテスタント他)とカトリック教会の両者を“主における兄弟”として認め、次のように説明しています。“この民は、その地上の旅の間に、その成員が罪にさらされたままであるとしても、キリストにおいて成長し、神の深遠な計らいに従って、優しく導かれ、天上のエルサレムにおいて永遠の栄光が完全に満たされて喜びに達するのである。”(3) そして、現状の課題を分析して以下のように解説しています。“事実、カトリック教会は神から啓示されたあらゆる真理と恵みのすべての手段を豊かに備えているとはいえ、その成員はそれらに応じた十分な熱意をもって生きているわけではない。その結果、別れた兄弟にとっても、また全世界にとっても教会の顔は十分に輝いておらず、……”(4)

“御国の福音”(マタ4:23)が信者一人一人の希望であり(ロマ8:24)、“御国を受け継ぐ秘められた計画”(エフェ1:8-14)がすべての信者の心に明らかにされる(コロ1:26-27)ことは、キリスト教信仰の土台でありますから、私たちは“預けられたタラントンを地の中に隠しておいた怠け者の悪い僕”(マタ25:14-30)とならないように、自ら聖書を熱心に学び、使徒パウロと共に「主に栄光が世々限りなくありますように、アーメン」(v.18)と心から言えるように成長しようではありませんか。

3. シラ

“主が祈りを聞き入れられる”ことは、虐げられた者、みなしご、やもめ等の貧しく弱い者たちだけの特権ではありません。「主はえこひいきされない」(v.16)のです。キリスト者である私たちは、自らの罪を懺悔し、主の憐れみを乞い、御国が来ますようにと祈るためには、先ず「御旨に従って主に仕える人」(v.20)にならなければならないことを理解しましょう。

ただの善意の人になるためではなくて、キリスト・イエスに結ばれた信仰の人となるために、神が聖書を通して一人一人に、「神の招きによってどのような希望が与えられているか、聖なる者たちの受け継ぐものがどれほど豊かな栄光に輝いているか悟らせてくださいますように。」(エフェ1:18)

アーメン、ハレルヤ。